

『エドウィン・ドルードの謎』における謎

梅宮創造

一八七〇年三月十五日、セント・ジエイムズ・ホールでの一夜、ダイケNZは多年の朗読公演をいよいよ閉じるにあたって一言弁じた。「……今から二週間もすれば、みなさんのご自宅にあつて別の朗読が始まるでしょう。その節にはまたお手伝いさせていただきます」。いささか含みのある言辞だが、これは新作を出版する旨の予告であつた。事実このとき『エドウィン・ドルードの謎』は原稿の一部がすでに仕上がり、出版の契約も済んでいた。公開朗読のほうは最終の十二回をもって「さよなら公演」として、その後はまた作家ダイケNZに立ち返る意向を、本人としてはもう八ヶ月ほど前から固めていたらしい。折しも公開朗読の巡業による疲労がたたり、しばらくの養生を余儀なくされていたときであつた。同年の五月には、ダイケNZとして憂うところ少なからず、遺言書までも作らせた。

ダイケNZが新作の着想をフォースターに知らせたのは一八六九年七月半ばのこととされている。「こんなのは、どうかね。とつて

も若い男と女がいて、二人の気持は離れていながら、何年も経つうちにとうとう結婚するはこびとなる——小説の最後でね」。しかしこのフォースターの伝えるところを鵜呑みにするわけにはいかない。ダイケNZの「メモ帖」を仔細に調べたエドガー・ローゼンバークや、ジョン・ピアによれば、フォースターがここに紹介する記述は六九年七月どころか、その九年前のものであつたといふ⁽¹⁾。フェリックス・エイルマーも同様の指摘をなし、フォースターのいう七月半ばの手紙とは、実のところ、一八六二年八月以前にダイケNZが「メモ帖」に記した文言をそっくり写し取つたものだと断じている(Aymer, 2012)。フォースターの真意のほどはわからない。

さらにフォースターが伝える同年八月六日の手紙には、「こないだの思いつきは捨てよう。実に興味ぶかい、新しいアイデアが湧いたのでね。それについては、ちよつといえないが……」とあるそうだが、この「新しいアイデア」は「ちよつといえない」としながら、そのすぐあとでダイケNZは新作のプロットをフォースターに開示

したという。まことに不思議な飛躍である。以下のごとし。「その直後に私（フォースター）はこう聞いた——これは叔父が甥を殺す話になるはずだ。独創的な点は、結末で殺人犯がおれの経歴を披露し、その際に、殺人の誘惑を感じたのがあたかも自分ではなく、ほかの誰かであったかのように語られるところだろう。最後の数章は死刑囚監房のなかで書かれることになるが、そこへぶち込まれたのは、まるで他人事のように飾り立てた、その話とおりの悪事があったこそだ。犯人は殺人を犯した直後に、殺人が当初のねらいからすればまったく無意味であったことを悟る。しかし犯人が誰なのかは最後までわからない。屍体を投げ込んだ生石灰の腐食作用に抗して金の指輪が残った一件から、被害者の身元ばかりか、犯行現場も犯人も割り出されることになる。……」(Forster, vol. II, 452)。

このフォースターの伝聞をどこまで信用すべきか、それについては慎重を要するところだろう。

九月下旬にはこの新作の表題が決まり、いよいよ書き出したのが同年十月であった。早くも十二月には分冊二号分までを書き終えたつもりでいたのだが、どうしたものか、デイケンズは十二ページ分の原稿が不足していた事実気づかなかった。彼として、これほどの誤算は異例のことである。どうしても衰弱の兆候は否めない。結局、三号分の一部を補填するという弥縫策をもって事なきを得て、本作第一号は予告どおり七〇年四月初めに刊行され、これは五万部を売り尽くし、『ピクウィック・ペイパース』の人気絶頂期におけ

る四万部をさらにしのぐ売行きとなった。小説家デイケンズの人気ときては、いまだ衰えの兆しすらみせなかった。

『エドウィン・ドルードの謎』は当初十二分冊を発行する予定であったが、その半分の第六号をもって作者死去のために未完に終わった。六号のうち三号までが生前に出て、後の三号分はジョン・フォースターの監修による作者死後の出版となった。従って、本作の後半部分には多少ともフォースターの意図が混入していることを確認しておきたい。実は生前未刊行の後半部三号分について、デイケンズは第二章までの校正刷りにみずから手を入れ、かなりの箇所を削除している。しかしそれにもかかわらず、フォースターは削除箇所もふくめて元の原稿どおりに発行したのである。フォースターの真意は不明だが、今日普及する『エドウィン・ドルードの謎』はフォースターの編集をそのまま踏襲しているために、デイケンズが最後に意図したものはやや異なるといわねばならない。むしろ何をもちいてデイケンズの意図と捉えるかについては、実際そう簡単な話ではないのだが。

ロバートソン・ニコルはヴァイクトリア&アルバート博物館に所蔵されるデイケンズの校正刷りと、刊行本『エドウィン・ドルードの謎』とを仔細に照合して両者の差異を明らかにしている (Nicoll, 413)。ニコルの調査によれば、デイケンズの削除箇所が皆無の第十九章、四行のみの削除がみられる第二十章、また第十七、十八、二十一章についてはかなりの削除がみられ、一ページ分がまるまる削

られている箇所さえある。もしやデイケンズがダッチエリーの言動（第十八章）を敢えてほかそうとした件にフォースターは賛同できず、独断でその削除箇所を復活させたものか。あるいは、もっぱらオリジナル原稿を保存しようとの計らいがあったものか。このような問題は本文校訂の常につきまとう宿命ともいえるが、とにかく複数のテキストを前にして、個々の差異を確認しながら、いずれを採りいずれを捨てるかという厳しい取捨選択が求められる。作者の真意に迫ろうとすればするほど絶望的にならざるを得ないのは、充分に納得されるところだ。ロバートソンよりもさらに綿密なテキスト研究をなしたマーガレット・カードウェルによれば、「現存する校正刷りの先に、また別の校正刷りがあったかもしれないのだ。その可能性は常にある」という次第で、作者の意図をめぐる判断はかぎりなくぐらつくものだろう。

それに加えて、未完作『エドウィン・ドルードの謎』をどのように読むかという問題がある。表題からすれば、小説の核心を成すのはエドウィンの「謎」であるはずだが、その謎の焦点をどこに求めればよいのか。いったい何が、この小説の謎なのか。カミング・ウォルターズの指摘によれば、本作に内包される謎としては、（一）エドウィンは殺されたか、否か、（二）話の途中で唐突に現れるダッチエリーとは何者か、（三）アヘン窟の老婆はなぜジャスパーを憎むのか、という三点に絞られるようだ。それらを柱として、他の登場人物の言動やエピソードに各種各様の謎がからんでくるという小

説構造になる。

登場人物たちの過去には何があったのか。それについて作者は多くを語らない。エドウィンとジャスパーについては、叔父と甥の関係である事実を除いて何もわからない。後見人たるジャスパーは相応の責任感をもってエドウィンに接してきたのだろうが、二人のあいだにこれまで何があったのか、まったくわからない。デイケンズは敢えてわからないように書いている。ミステリー物であるかぎり、これは当然の筆法というべきかもしれない。エドウィンとローザの関係にしても、両方の亡き父親どうしの了解で将来の結婚が約束されたというが、ここへきて互いにうんざりしてしまっている。実際何があったのか不明である。わずかに、ローザは三ヶ月前からジャスパーの音楽個人レッスンを受けていて、このレッスンが心の重荷になっていくという。パーティーの場面でも、ジャスパーの異様な視線に恐怖を覚えて、歌の最中に具合が悪くなってしまったことさえある。ジャスパーとローザとエドウィン、彼ら相互の関係には、どうしても曖昧模糊たる皮膜がかかっている。人間の愛だの憎しみだのが、いかにも不鮮明な輪郭をもって捉えられ、読者の前に放り出されるのだ。作者はそれ以上の読者サービスを避けているかのようである。

作者の死後しばらくは、この未完作をなんとか前後の辻褄が合うように語り尽くそうとする読者側の動きが目立った。真剣に原作とむき合って、ついに書かれなかった後半部分に光を当ててみせたの

が、まずR・A・プロクターであり、それに触発されるようにアン
ドルー・ラング、カミング・ウォルターズ、ヘンリー・ジャクソン、
ロバート・ニコル、またG・K・チェスタトンなどがそれぞれの「読
み」を展開してみた。要するに、存在しなかった後半部分を一つ
の大きな謎とみて、彼らはその謎解きに魅了されたわけである。

〔謎解き〕に没頭する人たちは、刊行された作品の言葉そのものを
超えてしまった」というカードウェル女史の言は、冷徹な学究の眼
を失うまいとする立場からの重要な指摘であろう。以下、「作品の
言葉」から大きく逸れぬように用心しながら、本作に宿された謎に
ついて再考したい。

この小説には、人物やプロットにからむ謎が多いのだが、まずは
表題からして一つの謎である。エドウィン・ドルードなる若者は第
二章で叔父の住まいを訪れ、歓待を受け、第三章では同じ町の女塾
にいる許婚いひなすけと語らう。読者はエドウィンの人となりや境遇をわずか
ながら知ることになるが、いったい彼のどこに謎があるというのか。
これほど存在感の希薄な青年はいないだろう。第八章でネヴィルと
口論になり、周りがさわぎ出して着々と何かが準備されていくよう
だが、エドウィンの謎とか秘密と呼ぶべきものは皆無といつてよい。
そうして、第十四章の決定的場面をもってエドウィンは作中から忽
然と姿を消してしまう。何がエドウィン・ドルードの謎かと問いた
くなるわけだが、もしこの表題にディケンズの制作意図が隠されて
いるとすれば、エドウィンの秘密は書かれなかった後半部において

いよいよ顕現するはずであったと考えねばならない。

ここに、エドウィンは実は生きていたという作品末尾の憶測が浮
上してくることになる。エドウィンはジャスパーに首を絞められな
がらも息を吹き返し、叔父の犯行の確証をつかむために（ハムレッ
トよろしく）、老人ダッチェリーに変装して再登場するという憶測
が一つある。これはR・A・プロクターがいち早く唱えた説であり、
ディケンズが用いる常套パターンの「死者による監視」(watched
by the dead)を当てはめた読みである。プロクターによれば、ディ
ケンズのほとんど全作品のなかに『オリヴァー・トウィスト』の
み例外)、被害者が加害者を監視するという構造が存在する。その
極端なならわれこそ、死者（実は生存）が殺害者を監視するという
パターンになるが、ここですぐに思い浮かぶのが「追いつめられて」
(Hunted Down, 1859) のとき復讐ものだろう。過去にこうむっ
た被害が復讐の執念をよぶ。被害者は燃えるような憎悪と怨念を胸
に隠して敵の身辺を監視し、朝に夕につけ狙う。そうやって機が熟
するのをじりじりと待つのである。エドウィン・ドルードの場合に
も同じパターンを踏んでいるというわけだが、プロクターのこの説
は大胆にしてスリル満点であるには違いない。またチャールズ・コ
リンズがディケンズに指示されるがまま描いたという分冊の表紙絵
からしても、エドウィン生存説を支持する読者は少なくないようだ。
表紙絵のなかで最も興味深いのは、中央下部に描かれた二人の人物、
とりわけ左側に帽子をかぶって佇む人物である。これはエドウィン

その人であり、その姿に灯をかざして見入っているほうがジャスパールであろうという見方がある。しかし二人の正体はコリンズでさえも知られていなかった。コリンズのスケッチに手を加えたルーク・ファイルズの表紙絵を見ると、謎はさらに深まる。闇のなかに佇むくだんの人物は、どこか女性めいて見えるではないか。これはエドウィンに身をやつしたヘレナ・ランドレスだろうという解釈があつて、そうとなれば、エドウィンはやはり殺されていたとも考えられる。

ディケンスズ亡き後にオーガステイン・ダリーが本作の劇化を企て、エドウィンの生死をめぐってファイルズとコリンズに事の真相を問合せた。作者と交渉があつた挿絵画家ならば真実を知っているはずだと思つたに違いない。コリンズの返答（一八七一年五月）によれば、「エドウィン・ドルードはジャスパールに殺され、二度と現れることはない」とディケンスズが語つたそうである（Aymer: 208）。しかしゲヴィン・ブレンドが疑義をかざしているように、まことしやかなエピソードなどというのは、仔細に観察すればあちこちに人為的な綻びが見えるものなのだろう⁽²⁾。信ずるに足らずというべきか。

あらゆる角度から作品を入念に読み込んだカミング・ウォルターズの解釈によれば、エドウィンはどうしても死なねばならない。ディケンスズの身内の証言からも、それは疑う余地がないという（Complete, 224-227⁽³⁾）。さらにウォルターズは、ダッチェリーはヘレナ・ランドレスがジャスパールを監視するために変装して登場したと

いう興味ぶかい主張をなしている。女の身でありながら老人に化けて、その声も、言葉つきも、食欲さえも男なりに装うという藝当がヘレナには可能であることを、ウォルターズは作中の証拠をもつて示している（Complete, 236-239）。ダッチェリーが折々手を隠すような挙動をみせるのも、女である事実が発覚せぬように用心したためだという。これは一つの卓見と評さねばなるまい。

G・K・チェスタトンなどは、ダッチェリーの正体をめぐってR・A・プロターを始めとする諸家の説を紹介したあと、それらのいずれも信用しない。何なら、ダッチェリーはミス・トインクルトンだろうとまでいう。チェスタトンとしては、一つの正解よりもさまざまな解釈を誘発する謎そのものに興味があるようだ。彼はジョン・ジャスパールを法廷の場において裁くという芝居仕立ての模擬裁判にまで参加しているが、当裁判については別稿に詳述したのでくり返さない⁽⁴⁾。

仮定の上にもまた仮定を重ねるようだが、もしジャスパールがエドウィン殺害を図つたとすれば、殺害の口は何であつたか。これは作中の暗示と、挿絵画家ルーク・ファイルズの証言⁽⁵⁾からも察せられるように、どうやら長いネッカチーフで絞殺したらしい。むしろこれについても、高所から突き落としたなどの異説があるのも事実だ。死骸をどう処理したか。『コーンヒル・マガジン』誌（一八八四年）に載つた匿名の記事によれば、生石灰を使って跡形もなく消滅させたのだらうという推理になるが、実際、これについては生前のディ

ケンズがすでにフォースターに語っていたらしい（本論1025ページの引用文参照）。ジャスパーは生石灰に溶けない時計とタイピンを取りはずして川に捨て、後で発見されたときの捜索攪乱に役立てようと思つたものか。折しも、クリスパークル師が堰のはしに光る物を見つけて拾い上げたところ、エドウィンのかだんの品物であつたというから、まさに筋書きどおりである。生石灰に関しては、ジャスパーが墓石工のダードルズに異常なばかりに接近しているあたりからも、殺害後の証拠湮滅にこの恐ろしい薬物が用いられたらしいことは大いに考えられよう。しかしファイルズの証言にせよ、フォースターの記述にせよ、それをもってデイケンズの制作意図と断定するには不十分である。ジョン・ピアが説くように、「デイケンズは分冊の発行途上というより、そもそも計画の段階にあつて、プロット上に大幅な変更を加えたとも考えられる」⁽⁶⁾のだ。こうなると、すべてが不分明の闇にすっぽりと包まれてしまう。

それよりも何よりも、ジャスパーの言動については実に不可解な部分が多い。エドウィンの叔父ジャスパーこそが謎のなかの謎である。まずは書出しのアヘン窟シーンに注目したい。妖しげな薄闇の空間にうごめく謎めいた人間ども、その口から洩れる不可解な(unintelligible)「ぶやぎ」、このアヘン窟の真只中にジャスパーが登場する。第二章で甥のエドウィンを大歓迎するジャスパー、第四章ではサブシーと、また墓石工のダードルズと会談して、第八章でのネヴィルとエドウィンの口論を唆しておきながら、そのあとで

はクリスパークル牧師に彼らの先々の不安を訴え、かたやグルー・ジャス弁護士と後見人としての話を交わしたり、第十二章ではダードルズに霊廟の奥を案内させたりと、ジャスパーはあらゆる場に登場して、あらゆる事柄に関与し、そのつど謎めいた言動を示す。第十四章を境にして、ジャスパーの存在感はますます高まるが、同時にその謎はますます深まる。

ある意味でジャスパーの秘密に最も近い位置にいるのは、アヘンふかしの王女様(Her Royal Highness the Princess Puffer)ではないだろうか。彼女と『マクベス』の魔女との類似は否定できない。アヘン窟の女は、『マクベス』の魔女よろしく、この小説の象徴的な意味合いを担っているともいえよう。女はまず第一章に登場して、作品の聖と俗の混じり合う雰囲気を作りあげるのに加担する。古い町クロイスタラムの聖なる場から一転して墮落と退廃に浸されたロンドン・イーストエンドのアヘン窟へと移り、その中心にジョン・ジャスパーがいて、くだんの王女様がいるという構図だ。「商売がふるわんのじゃ、ふるわんのじゃよ」、「胸がくるしい、胸がづらい」とくり返すこの女は後の章にも現れて、どこかジャスパーの運命につよく作用してくる気配がある。しかし核心にふれるような事柄は巧みにぼかさされ、『ちんぷんかんぷん』(unintelligible)という一言で片付けられてしまうのだ。

ところでアヘン窟またアヘン吸引は、当時として真に墮落と退廃の象徴であつたのだろうか。事実アヘンは十九世紀半ばを越すまで

医薬品として重宝され、市販されていた。その取扱いに制約が加えられるのは一八六八年の薬餌法 (the Pharmacy Act) によるが、それ以前はド・クインシーの告白にもあるように、「人間の聖なる特質がますます際立ち、愛情は曇りなく澄みわたり、なべて堂々たる知性の光につつまれる」(De Quincey, 47) など、アヘンの長所を称揚する言論もみられた。ディケンズが『エドウィン・ドルードの謎』を書いた当時は、アヘンに寄せる一般の態度がちょうど分岐点にあったときであり、奇しくも聖と俗の要素を併せもつこの作品の書出しにそのまま合致する時代でもあった。⁽⁷⁾

さて、冒頭のあと、次にアヘン窟の女が現れるのは山場の第十四章である。ここでジャスパールとエドウィンとが、女の恐ろしい予言、これこそ『マクベス』の魔女さながらに、定かならぬ謎めいた言葉によって固く結びつけられるのだ。「そりゃ呪われた名前だね、危険な名前だよ」。そのあと女は二三章に、アヘン窟でジャスパールをあしらう商売女として、また聖なるクロイスタラムの町の聖なる職に従事するジャスパールを指弾する女として登場する。女は他の作中人物たちの知らない裏事情まで知っているようだ。「牧師さま方をみんな集めても、あたしや、もつとあいつのことを知ってるさ」とは、ジャスパールの隠れた一面を暗示してみせた言であるが、小説のなかでは語られない事柄が多くあって、おそらくは小説のおしまいで驚くべき秘密が明かされるというディケンズお馴染みの流儀とも取れる。ついてはこのあたり、読者の想像力を大いに刺激するとみ

えて、なかには大胆にも女はジャスパールの母親であるとか、ジャスパールに穢され捨てられた娘の母親だとか推察するむきさえある。⁽⁸⁾ いずれも作中にひそむ微細な感触から生れた読みであり、ディケンズの言葉の域をとり超えてしまった感なきにしもあらずだが、とにかく確かな事実としては、女はジャスパールをとことん追跡し、必ずや恨みを晴らしてやろうとばかりにジャスパールを心底から憎んでいる。ジャスパールとのあいだに実際何があったのか、それは謎である。思えば、この小説が「夜明け」という、ジャスパールとアヘン窟の女の相交わる章に始まり、奇しくも「ふたたび夜明け」という、やはりジャスパールとアヘン窟の女が複雑にからまる章をもって中断しているのも、何か不思議な因縁を感じさせる。

アヘン窟の女は『マクベス』の魔女のように超然と人間界の上に立つのではなく、どういふつもりか、ジャスパール本人から秘密を嗅ぎだそうとする。万事を知り尽くしているという女ではないのだ。アヘンの効力でジャスパールの意識を眠らせ、心の底に押し隠している秘密を口走らせようと目論む。そうしてジャスパールは、口にしてはならぬことを呟いてしまったようだ。女はジャスパールに強い関心をもつ。こうして女の追跡が始まる。ジャスパールの身元が知れる。——と、アヘン窟でのジャスパールとは別のジャスパールが、古い町の聖なる場所でも高らかに歌っているではないか。女はその姿を見つめたあと「柱の陰から拳を振りたてる」という展開になるが、さて、その仕草はいったい何を意味するものか。「ジャスパールのことなら誰

よりもよく知っている」らしいこの女は、小説に書かれていない場面ではジャスパールと深く関わっているようだ。しかしそれ自体が、また謎である。

ふたたび問う。人間ジャスパールとは何者か。発表された半分の中身において考えるなら、エドウィンの謎というよりも、むしろ叔父ジョン・ジャスパールの心情と行動のほうに謎の比重が大きいかかっているのは疑うべくもない。ディケンズの次女ベルギー夫人の証言に、こうある。「父」が興味と新鮮味を作品構想のなかに求めたのは、ただ《謎》だけではありません。父本人が語ったように、殺人犯がまるで他人事のように自分の誘惑や気質や性格を述懐してみせるというような、まあ、いわば心理的叙述といったところに作品の新しさがありませんか」(Walters, *Complete*, 225)。

「殺人犯の誘惑や気質や性格を心理的に叙述する」とやら、ここにこそディケンズの関心があったとの指摘は一考に値するものと思われる。ジャスパールは叔父とはいえ、エドウィンよりもわずかな数年の長にあり、ここにはやや特殊な二人の若者の交わりがあるといつてよい。親のないエドウィン青年の庇護を引受けながら、ジャスパール自身にもまた若者としての悩みや憧れがあったはずだ。その心内にはうかがい知れぬ影と屈折とがあり、ジャスパールは一筋縄ではいかぬ人物として登場する。「苦しみが——悩みがあつてね、ときどき潰されそうになる。それでアヘンにすがつてきた」(15)。

ジャスパールは悪びれることなくエドウィンにこう打明けるのだが、

その悩みとはいったい何なのか。「とりとめのない野心というか、憧れ、不安、失意というか、何と呼ぶべきかね」。本人でさえもはっきりしない模糊たる感情が心中にくすぶっているようなのだが、要するにジャスパールは不幸な男として生きている。そうして早々と、何かとんでもない方向へ暴走していくような予兆さえ感じられるのだ。エドウィンとの会話のなかでは、「警戒」(warning)という一語をもつて、何やら危険信号のごときを送っている。

「僕はプッシーを学校から引っぱり出して、さっさとエドウィン・ドルード夫人にしてやろうと思うんだよ」とエドウィンがいえば、「それなら、警戒することにはならんな」(18)とジャスパールが返す。彼は何を警戒せよといたいのか。エドウィンはまた、叔父があまりにも愛しすぎるから離れたいという。あとの所では(第十三章)、叔父がちよつと恐いとまでいう。いったいジャスパールの愛とは、どういう性質の愛なのか。極端なまでに爛熟へ傾き、やがては危険な色調さえ帯びて当事者を脅かすまでになる、その種の愛のあらわれとしては、オスカー・ワイルドの『サロメ』に一つの類型を見るが、その危険の只なかには同時に世紀末の妖艶な華が咲いているはずである。聖歌隊長ジャスパールの朗々たる歌声のなかに、ヨカナンを執拗に求めるサロメの声音が混じってはいないだろうか。ヨカナンを近づけ、ヨカナンと唇を重ねようとするのは、畢竟、自己の歪んだ愛欲充足にほかならず、はげしい愛情とはエゴイズムの一形態にすぎまい。ジャスパールの愛情はもっぱら自己の欲望に固く結ばれ、

裏を返せば、危険の要素をふんだんに含みもつ毒物そのものである。

「甥は安らかに、気持よさそうに眠っている。ジョン・ジャスパールは火のついていないパイプを手にして、しばらくのあいだ、甥の寝姿をしげしげと見下ろしていた。それから足音を忍ばせて自室へ入り、パイプに火をつけ、夜更けに立ちあらわれた幻にわが身をゆだねたのであった」(48)。

ジャスパールが吸うパイプとはアヘンに他ならない。エドウィンのは寝姿を見ながら彼は何を思案していたのか。アヘンがもたらす幻とは何か。それはおそらく危険な像を結んでいたであろうことが、ずっとあとに、ロンドンのアヘン窟で漏らす話(第二三章)のなかに明かされることになる。ジャスパールはアヘンがもたらす夢幻のなかで幾度となく、ある一つの事をくり返していたそうだが、その幻はついに現実のものとなり、「やっってしまったえば一瞬のこと、わざわざやるまでもないようだった」というわけだ。それが何であったのかは自明である。

「じたばたするわけでもなく、真っ青になったり、哀願するのでもない。それにしても、あんなのを見たのは初めてだ」ここでハッとする。

「何を見たって？ おまえさん」

「ほら、ご覧よ。なんて哀れな、卑しい、情けないあれなんだろう。幻じゃないさ。やっってしまったんだ」(264)

『エドウィン・ドルードの謎』における謎

ジャスパールの内奥にわだかまる感情とは、いったい何なのか。エドウィンとローザの許婚関係にしつこく介入しないではいられない。しかしそうかといって、恋愛物によくある三角関係のもつれかといえ、ただそれだけに止まらないようだ。ジャスパールが甥のエドウィンを慕っていたのは仮に疑えない事実としても、その甥がかねて約束のローザと結ばれる一事については喜んでいただくかわからない。おそらく喜んではいまい。それならジャスパールはエドウィンを手放したくなかったのか、と考えてみる。女と結婚して離れていってしまうのはやりきれないというのなら、相手の女を憎んでも不思議はないはずだ。しかしジャスパールはローザを憎んでいたのだろうか。音楽レッスンにあつてローザがジャスパールに感じた恐怖とは、ジャスパールの深い憎悪の念に端を発したものなのだろうか。もしそうであるならば、後の章でローザに愛を告白するジャスパール(第十九章)とは何者なのか。

チエスタトン流に簡明に考えるなら、ジャスパールははじめからエドウィンのことなどちっとも愛していなかった、となる。つまり偽っていた。本心ではエドウィンを憎んでいたのである。いつかこの憎しみを晴らしてやりたいと思っていた。何がそんなに憎いかというの、そう単純ではなさそうだ。女にもって、明るい性格で、人生街道を楽々と闊歩しているような若者に嫉妬していたのかもしれない。ちようど『オセロー』のイアーゴのように、とにかく『奴』

が憎いのである。あるいはリチャード三世が毒づくように、ありとあらゆるこの世の平安を呪ってやるぞというものだろうか。要するに、憎しみの権化としてジャスパーを登場させ、彼がこの先何をやらかすかというところに小説の主眼が置かれ、ストーリーが着々と肉付けされていく。そんなふうには考えられなくもない。

ジャスパーは要するに悪い人間である、といった作中のどこに善人たるジャスパーがいるか、⁽⁹⁾とはフィリップ・コリンズの率直な指摘である。善人と悪人とを歩き来する二重人格者だなど、とんでもないという。アヘンに惑溺するかたわら、真面目な聖歌隊長を務める、そんな人間はザラにいるだろうというのだ。コリンズの冷めた眼がとらえるところ、斯界の注目を集めたエドマンド・ウィルソンのディケンズ理解などは、どれほど大袈裟で、どれほど牽強附会の説と映ったことであろうか。⁽¹⁰⁾

たしかにジャスパーは悪党には違いない。「君を死ぬまで追いかけてやるぞ」というような烈しい、歪められた愛の告白に恐怖を覚えたローザが、ときを措かずして後見人のもとに避難するのは、むしろわかりやすい行動である。ジャスパーは愛を絶叫しながら、その仮面の下で憎しみをつのらせていたのだ。この恐ろしいまでの愛の告白は、女をちぢみ上げらせ、恐怖の底へ突き落とす。ジャスパーはエドウィンが消えてしまったあとでこの暴挙に出た。あたかも、早くからローザに恋い焦がれ、その恋する一人の女のために、エドウィンの婚約からエドウィンそのものの存在まで、すべて排除すべ

き敵であったかのように。実際、そもそもローザに恋心など抱いていたかどうか。ジャスパーの関心は色恋沙汰などよりも、まったく別のところにあつたように思われてならない。

また、こうも考えられる。エドウィンに寄せるジャスパーの愛情が当初から偽りであつたと考えるより、偽りなきままに殺人へと発展したと解するほうが、小説の味わいは勝るのではないか。ディケンズが「新しいアイデア」というとき、その種の効果を狙わなかつたとは思えない。愛するから殺すという、この人間の心の不条理、その闇の領域には三十年前からすでにアラン・ポウが切り込んでいたし、怪しげな無意識のはたらきまでを導入して、その力に動かされる人間の様態ともなれば、十年前にウィルキー・コリンズの『月長石』が出ている。ディケンズがそれらの先例を意識しなかつたはずはない。ディケンズは一八四二年のアメリカ旅行でポウと会談して少なからぬ興味を覚え、コリンズの一作は、そもそもディケンズの編集になる『オール・ザ・イヤーズ・ラウンド』のページを飾ったものであつた。

ジャスパーはエドウィンを愛しつつ、同時にまたローザを愛する。そうしながらもエドウィンは遠からず国を去り、ローザもまた自分を拒否することぐらい始めからわかっている。そんなジャスパーの心に何が起こつたか。愛だの恋だのを超えて、ジャスパーが凝視していたものは何なのか。この謎に満ちた人物の形象を、どのような言葉でもって表わし得ようか。ここには現代文学にも通じる大きな

課題があるはずだが、デイケンズはその課題にどう対処したかとなれば、それこそ、この作品が未完に終わったために解釈上の限界がある。遺された前半部分にわれわれが読み取るのは、ジャスパーなる特異な人物の執拗なまでの愛情表出と、その屈折した心情が恐ろしい方向へと脱線していく様だけである。それがどんな意味をもつかという作者の思索の様相が、ついに書かれなかった本作品の後半部分に何がしかの跡をとどめるはずではなかったか。

もしや、ローザこそがジャスパーの本質をもっとも早く、もっとも正しく直覚していたのではないかとも思う。ローザにはすでに事の真相が見えていたのかもしれない。ただ作者はそれを露骨に書いていないだけだ。またローザの後見人であるグルー・ジャスも、ローザとは別の観点からジャスパーの表づらを深く疑っている。第十五章の末尾には、はなはだ意味ぶかい、実にみごとな叙述がある。グルー・ジャスがジャスパーにローザとエドウィンとの婚約が破談になった旨を伝えた直後のこと、「そのときグルー・ジャスは恐ろしい叫び声を聞いた。おぞましい男の姿は、椅子の上にも、どこにも見えなかった。ただ床の上に、ずたずたの、ぼろぎれの塊が見えたばかりだった。それでもグルー・ジャスは、相変わらず掌をひらいたり閉じたりしながら、暖炉の火に手をあたたため、ぼろぎれの塊をじっと見下ろしていった」(175)。

「ぼろぎれの塊」——ジャスパーの姿は、それに近づく者までも謎めいた色に染めってしまうようだ。グルー・ジャスはその好例ともい

うべきで、彼の心の裡もいつしか謎につつまれ、いったいグルー・ジャスは何を考えているのか判然しないところがある。明らかな一事としては、ジャスパーを疑い、憎み、そしてローザを心から愛していることぐらいだ。かくて、謎はいよいよ深まる一方である。

もう一つ、プロットの進行を助ける要素についても無視できない。セイロンからの二人の孤児、ネヴィルとヘレナが慈善の救いによってクリスパークル牧師のもとへ寄宿することになるが、これは作中の人間関係を重層化し、話のはこびを活性化するためには欠かせない筋立てである。この筋が入り込むことによって、ネヴィルとエドウィンが出会い、つまらぬ言葉の応酬から二人の関係がこじれ、それに乗るようにしてジャスパーが動き出す。行き着く先として、クリスマス・イヴとその翌朝の状況を描いた第十四章こそは、この小説の行方を決定づける極めて重要な一章である。

クリスマス・イヴの夕べにはエドウィンとネヴィルをよんで、二人の仲直りパーティを催すはこびとなる。ネヴィルは気が進まぬながらにジャスパーの家の前までやって来て、ためらいがちに往ったり来たりしたあと、ようやく裏口の階段を上っていく (And he goes up the postern stair.)。"he" がイタリックで強調されている点に注意されたい。つづいてエドウィンの叙述に移るわけだが、ここではアヘンを吸う老婆が近づいてきて、ジャスパーにちなんだ不吉な話を吹き込む。エドウィンは女と別れたあと、橋を渡り、川のへりを歩いていると、風がつのり、空が荒れ、川の水が騒ぎ、稲妻が

光って、老婆の言葉がまた聞こえてくる。あんたの名前は呪われた名前だ、危険な名前だ、と。エドウィンはジャスパールの家のアーチウェイをくぐり、“And he goes up the postern stair.”となる。

次は三人目として、ジャスパールの一日が記述される。この日はこれまででない完璧な美声をふるって教会の仕事に努めてくれたとか何とか、クリスパークル牧師はジャスパールを激賞する。このあたり二人のやりとりにも注意しておきたい。ジャスパールの明るい、いつになく屈託のない態度がかえって異様に感じられないだろうか。さて、ジャスパールはクリスパークル牧師と別れる。ひとり家路をたどりながら、小声でまた歌いだす。寸分狂いのない歌である。こんなことは、かつてなかった。家の入口のアーチにさしかかる。このあとが瞳目すべき一瞬だ。「ジャスパールは覆いの下でふと立ち止まり、例の黒い大きなスカーフをとって、腕に輪を作って引っかけた。このわずかのあいだだけ、キツとなり、硬い表情をみせた」(164)。それからまた歌いだして、“And he goes up the postern stair.”という話になる。三度くり返される右のリフレイン「裏口の階段を上っていく」は、どうしても何か起こりそうな、不気味なひびきをもつて迫るではないか。イタリックの“he”なども、三人めいめいを指しながら、先のほうで特定の一人に重なっていくような凶々しいニュアンスさえ感じられる。

このあとは一同が集うパーティーのひとつとなり夜もふけていくはずだが、パーティーの内容については一切触れられず、嵐が刻々と

激しくなっていく外の様子だけがページ近くにはわたって描写され、次はもう嵐が過ぎた翌朝の場面となる。嵐の一夜のどこかしらで、恐ろしい事件が起きていたはずなのに、事件そのものは裏側の見えない所に押し隠されてしまっている。これはちょうど『マクベス』の最重要場面であるダンカン王殺しが、観客の目にふれぬ舞台裏で、奇声を伴いながら実行されてしまうのにも似ている。そしてこのあとのジャスパールの動転ぶりと、甥の行方を捜索するひたむきな行動もまた、王殺しのあとのマクベスの挙措にすこぶる近いものがある。

ネヴィルの存在はかようにジャスパールの行動に弾みをつけ、プロットの骨格づくりに寄与しているのは確かだが、双子の妹のヘレナも同断である。ヘレナはローザの側に付いてジャスパールと対峙し、エドウィンの失踪後は兄ネヴィルを擁護しながら背後に退いていく。影の存在のようでありながら、ヘレナは作中どこかにしつかりと生きていく感がある。先述したように、クロイスタラムの町に突如現れるダッチェリーなる老人が、実は変装したヘレナに違いないという見方さえある。そう考えれば、いきおいヘレナの存在は大きくなるのだが、これも端倪すべからざる謎であろう。デイケンズ原稿の末尾が、このダッチェリーによるジャスパール監視の一事をもって終るのも興味ぶかい。「ダッチェリーは部屋の隅の戸棚をあけて棚からチョークのかけらをつまみ出し、扉の上から下へ太い得点ラインを追加した。それから、いかにも旨そうに朝めしを食べ始めた」(274)。

ダッチエリーの立居振舞いからして、一つ一つが謎である。ディケンズの筆は謎から謎へと駆けめぐる。謎を小説構造の要石とするからには、謎は最後まで謎のまま温存しておかねばならない。すべての手札を明るみに出してはならぬ。暗示と削除を旨として、語らないことをもって多くを語り、謎の中心をそのまま永久に闇の底に沈めてしまいかざる。ディケンズ作品の一大特徴をなす饒舌体が、この作にあつては影をひそめ、それとは正反対のヴェクトルをもつ凝縮文体のうちに稀有のかたちを形成しているのが、「謎」の生みなす力学の裡にみて取れよう。『エドウィン・ドルードの謎』はその意味でも特異な小説であり、ディケンズ最晩年の試みとしてひときわ注目し値する一作といえる。

注

- (1) Rosenberg, *The Dickensian* (1890) pp.42-43. 及び Beer, *Dickens Studies Annual* (1984) p.144. 参照。
- (2) Brend, *The Dickensian* (1955) 参照。
- (3) エドウィンの生死については諸説紛々であり、ゲヴィン・ブレンドはそれらを二グループに分けて「葬儀屋」と「復活屋」の二種に区別している。上掲資料参照。
- (4) 詳細は拙稿「最期の一作」、『英文学』第一〇三号所収(早稲田大学英文学会、二〇一七年)を参照されたい。
- (5) 本作品の挿絵は当初チャールズ・コリンズが担当はずであったが、健康上の理由から叶わず、ルーク・ファイルズがその任についた。本作品の内容からみればディケンズとの重要なやりとりを、ファイルズはすつとあとに

『エドウィン・ドルードの謎』における謎

なつて TLS (27 October, 1905) に書き送った。同様の話が W.R. Hughes, *A Week's Tramp in Dickens-land*, p.140 にも紹介されている。

- (9) Beer, *Dickens Studies Annual* (1984), p.153.
- (7) Robert, *Dickens Studies Annual* (2009) 参照。また *All The Year Round* (12 May 1866) に於て 'Lazarus Lotus-Eating' と題して ロンドン・イーストエンドのアーヘン窟探訪記が載っている。当エッセイは『エドウィン・ドルードの謎』書出しの数ページに通じる趣がつけよう。
- (8) Jackson, p.60. フイリップ・コリンズの説によると、アーヘン窟の女のモデルは老婆ではなく、Sally という二六歳の女であるようだ。そこから類推して、アーヘン窟の(若い)女はかつてジャスパールに穢されていたのではないかという。しかし当人の述懐によると、「この商売を始める前に十六年間の酔いどれだった」(Edwin Drood, p.4) というから、そう若くはなつはずである。Collins, 'Inspector Bucket visits the Princess Puffar' 参照。
- (6) ジャスパールを善人とみる論者はフエリックス・エイルマーを含めて、シドニー・ルイス (*Nottingham Guardian*, 9 January 1912)、キャサリン・ケリー (*The Dickensian*, January 1925)、リチャード・M・シーカー (*The Drood Murder Case*, 1951) などがある。Aylmer, p.12 参照。
- (10) Collins, *Dickens and Crime*, XII. コリンズのメモランダム・ウォールン批判については pp.304-312 参照。

【引用・参考文献】

- *テキスト: Dickens, Charles, *The Mystery of Edwin Drood*. Vintage Books: London, 2009. これに加え Clarendon 版 Oxford World's Classics 版 Penguin English Library 版を参考に供した。
- Aylmer, Felix, *The Drood Case*. London: Rupert Hart-Davis, 1964.
- , 'John Forster and Dickens's Book of Memoranda', *The Dickensian*, December, 1954.

- Baker, M. Richard. *The Drood Murder Case*. University of California Press, 1951.
- Beer, John. 'Edwin Drood and the Mystery of Apartness', *Dickens Studies Annual*, vol.13, New York: AMS Press, 1984.
- Brend, Gavin. 'Edwin Drood and The Four Witnesses', *The Dickensian*, Winter, 1955.
- Cardwell, Margaret. *Edwin Drood: A Critical and Textual Study*. Ph.D Thesis, 1969.
- . Introduction to *The Mystery of Edwin Drood*. Oxford World's Classics, 1982.
- Collins, Philip. 'Inspector Bucket Visits the Princess Puffer', *The Dickensian* (May, 1964)
- . *Dickens and Crime*. The Macmillan Press, Third edition, 1994.
- De Quincey, Thomas. *Confessions of an English Opium-Eater and Other Writings*. Penguin Books, 2003.
- Dickens, Charles. *Letters*. Vol.12, Eds. Madeline House & Graham Storey, Oxford: Clarendon Press, 2002.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. London: Chapman & Hall, 1899.
- Forstye, Charles. *The Decoding of Edwin Drood*. London: Victor Gollancz LTD., 1980.
- Hughes, R. William. *A Week's Tramp in Dickens-land*. London: Chapman & Hall, 1891.
- Jackson, Henry. *About Edwin Drood*. Cambridge at the University Press, 1911.
- Jacobson, Wendy S. *The Companion to The Mystery of Edwin Drood*. London: Allen & Unwin, 1986.
- Kaplan, Fred. *Dickens and Mesmerism*. Princeton University Press, 1975.
- Lang, Andrew. *The Puzzle of Dickens's Last Plot*. London: Chapman & Hall, 1905.
- Levy, J.W.T. *The Trial of John Jasper for the Murder of Edwin Drood*. London: Chapman & Hall, 1914. (Vintage Books, *Edwin Drood* 未完小説全集)
- Morford, Henry (formerly attributed to Charles Dickens the Younger and Wilkie Collins). *John Jasper's Secret*. New York: R.F.Fenno & Co., 1905.
- Nicoll, W. Robertson. *The Problem of 'Edwin Drood': A Study in the Methods of Dickens*. Hodder and Stoughton: London, New York, Toronto, 1912.
- Pakenham, Pansy. 'The Memorandum Book, Forster & Edwin Drood', *The Dickensian*, Summer, 1955.
- Proctor, Richard A. *Watched by the Dead*. London: W.H.Allen & Co., 1887.
- Rosenberg, Edgar. 'Dating Edwin Drood', *The Dickensian*, 1890.
- Tracy, Robert. 'Opium is the True Hero of the Tale: De Quincey, Dickens, and The Mystery of Edwin Drood', *Dickens Studies Annual*, vol.40, New York: AMS Press, 2009.
- Walters, J. Cumming. *Clues to Dickens's "Mystery of Edwin Drood"*. London: Chapman & Hall, 1905.
- . *The Complete Mystery of Edwin Drood*. London: Chapman & Hall, 1912.

* 本稿の一部は二〇一五年度特定課題研究助成費・特定課題基礎助成 (2015K-051) に基づく。